

中世城館縄張り調査の意義と方法

千 田 嘉 博

-
- | | |
|------------------|-------------|
| 1. はじめに | 4. 調査成果の史料化 |
| 2. 縄張り調査の位置 | 5. おわりに |
| 3. 縄張り調査の方法と図化表現 | |
-

論文要旨

中世城館の調査はようやく近年、文献史学、歴史地理学、考古学など、さまざまな方法からおこなわれるようになった。こうした中でも、城館遺跡の概要をすばやく、簡易に把握する方法として縄張り調査は広く進められている。縄張り調査とは地表面観察によって、城館の堀・土塁・虎口などの防御遺構を把握することを主眼とする調査をいう。そしてその成果は「縄張り図」にまとめられる。

このような縄張り調査は、長らく在野の愛好家によって支えられてきたため、調査の基準が不統一である。そこで本稿では、縄張り調査の意義と方法を具体的に検討した。その結果、縄張り調査は測量調査や発掘調査がおこなわれる前の、仮説的な作業としてすべきであることを示した。縄張り調査と測量・発掘調査はそれぞれ段階の違い、補い合う調査だと位置づけられる。

つぎに、基準となり得る縄張り調査の方法を提示した。ここでは正確な地形図をベースに作図すること、簡易測量器や歩測などで測距を必ずすること、遺構理解のポイントになる虎口などを詳細に観察することを述べた。また成果図面の浄書など作業は、考古学の手法に従ってすべきことを述べた。そして縄張り図を地域史解明の史料として活用する方法として、織豊系城郭の虎口を中心にした編年を事例に、考え方と作成のプロセスを示した。

これからの縄張り研究は、城館研究を推進するさまざまな他の研究方法との協業を、一層推進しなくてはならない。その中で縄張り調査は、城館の防御性から中世社会を解明するという視点を、より鮮明にして研究を深化させるべきである。それがはじまりつつある、総合的な城館研究の中で、縄張り研究が果たすべき役割である。それぞれの研究分野から、異なる城館像を出し合い、討議することで、多様な面をもつ中世城館は、はじめてその姿を現わすであろう。

1. はじめに

近年、中世史研究において、現地調査の成果を史料として活用することが広く行われ、考古学が中世・近世の諸遺跡を対象とするようになったことから、中世城館遺跡に対する関心が急速に高まっている。中世城館調査といえば、縄張り調査しかなかった時代は明らかに幕を降ろした。今後、多様な調査手段の中で、縄張り調査の占める意義と使命を認識し、協業することが城館研究者には求められる⁽¹⁾。

とはいえ、中世城館を研究していくためには、まず的確に現況の遺構を把握することが大切であることに変わりはない。その遺構把握の第一歩として、地表面観察による踏査図面作成が重要であることはいうまでもない。一般にこの作業は縄張り調査、得られる図面は縄張り図と呼ばれる⁽²⁾。ところが、こうした作業はこれまで長らく、在野の研究者・愛好家によって担われてきたため、方法としても、方法論としても未熟で、整備不十分の段階にある。

文献史学、考古学、歴史地理学などさまざまな方法の協業から、城館研究が構想されている現在、遺構把握の最も基礎的な作業である縄張り調査とは、いかなる調査なのか、示すことは急務であるといわねばならない。そこで検討すべき問題点を整理していく。

縄張り図の作成は、その城館の特徴を理解することと不可分の関係にある。このため、良質の図面を作成するには、一定度の訓練が必要である。だから経験も大切になる。しかし経験とは違う次元で、調査自体のもつ問題を認識することが重要である。縄張り調査が直面する問題にはふたつの面がある、と考える。ひとつは縄張り調査の役割の問題である。そして、もうひとつは測量技術と表現の問題である。まず、縄張り調査の役割についてみる。

地表面観察による踏査図面として、縄張り図はいかにあるべきか。別言すれば、どのような情報を第一に表現すべきなのだろうか。城館研究者は城館のもつ最大の特徴である防御性、その具体的表現である堀・土塁・虎口・石垣などを主眼に調査してきた。これに対し歴史学者、考古学者は「城館調査は縄張り調査だけでは不十分である。城館研究者の視点は軍事面の研究に偏っている」と批判してきた。

こういう意見は、多くの場面で語られている⁽³⁾。確かに中世城館を総合的に解明するためには、さまざまな視点からの研究が必要である。たとえば、政治拠点、地域開発、日常生活、経済流通の中心地などの視点が心要であることは、いうまでもない。そうした点を、ないがしろにしてもよい、というつもりはない。むしろ総合的な研究を進めることが、城館研究にはひじょうに重要だと考えている。また多様な評価の視点があるべきだと思う。

しかし、地表面観察による現地調査では、遺物をまとめて検討することは不可能である。個々の曲輪内に造営されていたであろう、建物群を見通すことはできない。あたりまえのことだ

が、縄張り調査は万能ではない。だとすれば、総合的な城館研究の中で、縄張り研究の占める位置を十分認識して、着実に調査を進めることが、重要ではないか。

つぎに、測量技術と表現の問題をみる。これまで、縄張り研究を支えてきた在野の研究者・愛好家の成果は、たいへん大きいとしなければならない。しかし特に測量や図化について専門⁽⁴⁾にしてきたわけではない「城館研究者」の中には、適切でない図も多く見受けられる。また、考古学を専門にする者でも、山城調査での簡便な作図には通じていないことも多い。その結果、信頼性の低い図面が「縄張り図」として紹介されることになった。

こうした未熟な図面が氾濫したことが、縄張り図に対する印象を抜きがたく、悪くしてきた。しかしそれは一方で、考古学者や歴史学者がまじめに城館研究に取り組んでこなかったこと、行政が無批判に粗悪な図面を、報告書などに使用してきたことにも原因がある。だから、こうした現状を打開するため、共通の縄張り調査の具体的方法を示し、基準をつくることが重要だと思われる。

そこで、本稿では縄張り研究から進める城郭研究をより力強く推進するために、まず縄張り調査が城館調査に占める位置を考える。そして調査方法の基準づくりに向けた、具体的調査方法を提示する。さらに、縄張り調査によって把握した遺構を、どう史料として活用していくのか、遺構編年作成のプロセスを事例に視点を示す。

2. 縄張り調査の位置

中世城館遺跡は広大な面積を有し、地形を最大限利用して築かれている。そして、きわめて複雑なプランをもつことが多い(図1)。また現況は山森・ブッシュになっていることがほとんどである。このため、すぐに本格的な測量調査を行うことは、むずかしい。だから縄張り調査は、地表面観察可能な中世城館遺跡への、最初のアプローチの方法として、一般的に行われている。

しかし、測量図と違い縄張り図には、調査者が目で見、身体で感じて確認し、遺構であることを認識したものしか示されない。だから遺構は調査者が理解した形にそこに存在する。このため限りなく客観に努めても、完全に客観化することはできない。また現状では個人的に作成されることが多いから、図としての精度も完全ではない。それでは個人的な略測量の調査で、どの程度の精度が確保できるかみてみよう。

愛知県岡崎市岩津にある岩津城(図2)は、縄張り図作成後に、測量図面がつくられ追検証された事例である。上段A図が1985年に千田が作成した縄張り図。近年の縄張り図の作法に従って、ケバ描きでまとめられている。下段B図が1987~88年にかけて岡崎市教育委員会によってつくられた測量図である。原図の縮尺は1:500に調整され、もちろん等高線によって城を⁽⁵⁾

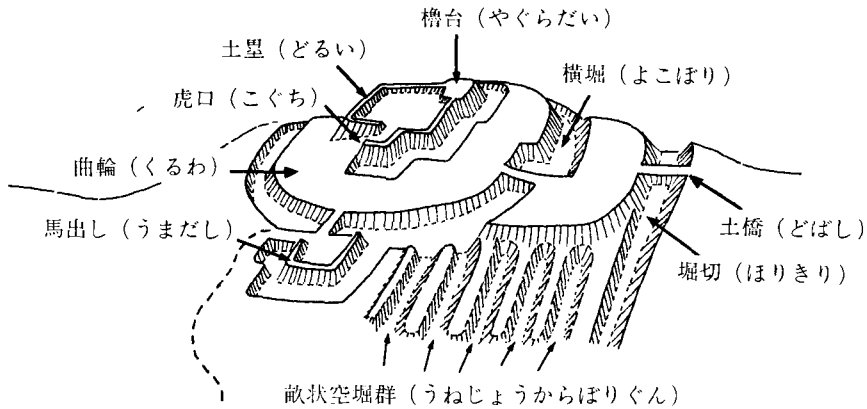


図1 山城遺跡の名称

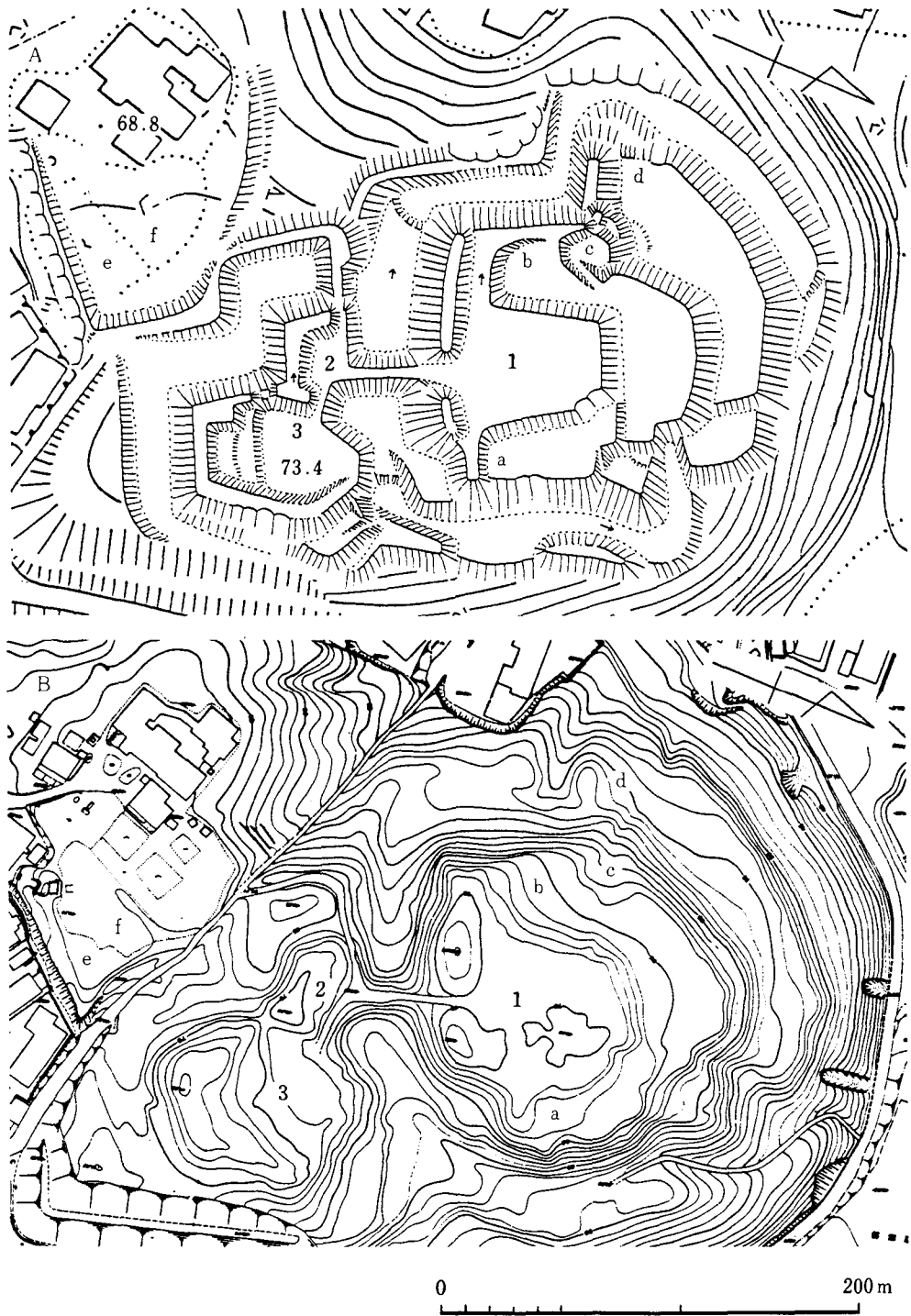
Fig. 1

描き出している。A図は2・3が西に振れていること、1東の土塁aの位置が南にズレていることをのぞけば、全体的には比較的良好に城を捉えているといえよう。

細部の遺構表現を比較する。1の南側には虎口を挟み込む土塁が伸びる。A図ではシャープに描かれているが(確かにそのようだったと記憶しているが)、B図ではなぜかかなりだらっとした感じになってしまっている。2は織豊系城郭に特徴的に出現する過渡的な馬出しである。A図ではそう認識されたので、そのように描かれる。しかしB図だけでは、馬出しであることを読み取るのはかなりむずかしい。

1の西側には一段下の曲輪に行くためのスロープbがある。A図では明瞭に判読できるが、B図ではやはり判断がむずかしいだろう。またスロープを下ったところには小さな窪地状の枡形cがある。B図ではこの部分が一段低くなっていることは読み取れるが、これだけでは枡形と断定することは困難である。土塁dは枡形から下る城道を守り、南側の堀底へ強烈な横矢(側射)をあびせることを狙ったものである。これは両図ともよく表現できている。eは半壊の土塁残欠である。両図とも描く。しかしfは、地表面をさっと見ただけではわかりにくい土塁の痕跡の可能性がある。A図ではわからないが、B図では描かれている。こうした等高線によって示される微細な地形の問題は、遺跡の評価に踏み込んで重要になることがある。後に詳しく検討する。

岩津城は、縄張り図の作成がひじょうに成功した事例に属そう。また測量図もコンターの間隔がさらに短ければ、細部の表現も違った結果になったと思われる⁽⁶⁾。しかし、このように縄張り図と測量図を比較すると、縄張り図でも城館遺跡を検討する際の、有力な史料になり得るといえる。そして等高線では分かりにくい細かな遺構も、ケバ描き図面では明瞭に読み取ること



上図(A) 縄張り図[千田 1985] 下図(B) 測量図[岡崎市教委 1989]

図2 愛知県岩津城要図

Fig. 2

ができることがわかるだろう。将来、測量図が広く基本資料になったときも、等高線とケバを併用する必要があるだろう。

しかし城館の範囲が広がったり、城館内の比高差が大きい場合など、縄張り調査がうまくいかないこともあり、どの城館跡でも一定した精度の図面が描けるとは限らない。調査者が違えば、岩津城でも馬出しなどの評価は異なる可能性があり、図の表現も変わってしまう。こうした問題があるから、いくら正確だと思われる縄張り図でも、測量調査の追検証で確認されるまでは、使い方に一定の限界がある。

このように、現在一般的な縄張り調査は、それ自身として、限界をもつ。調査者はこの点を、深く認識する必要があるだろう。同じ地表面観察による調査でも、注意深く行われた測量調査なら、各遺構の関係が客観的で正確に把握されるだけでなく、微細な特質を浮かび上がらせることができる。そうした事例を、奈良県奈良市に所在する^{みょうごう}若荷城⁽⁷⁾の測量図(図3)にみる。

図は50センチ間隔の等高線と上端・下端を示すケバで遺構を表現する。原図の縮尺は1:100

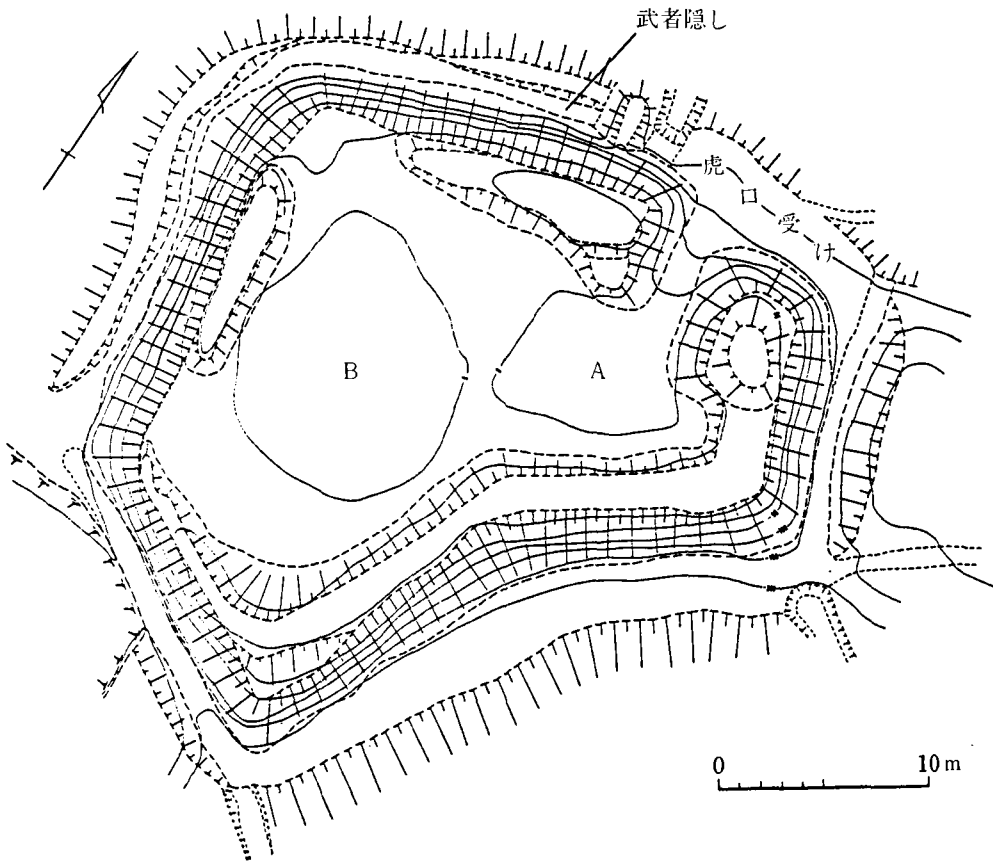


図3 奈良県若荷城測量図

Fig.3

である。ここで注目したいのは、通常の縄張り調査では得られない、等高線の威力である。

茗荷城はいわゆる単郭方形の丘陵上の砦で、城郭が果たすべきさまざまな機能は、ひとつの曲輪に収斂されている。注意深い城館研究者が縄張り調査を行えば、虎口両脇の土塁が互い違いになって開口する、くい違い虎口であること、その西横の土塁の直下に、虎口前のテラス（虎口受け曲輪）に進撃してきた敵を、側面から攻撃する武者隠しがあることを、見抜くであろう。しかし、単郭の曲輪内が、巧妙に機能分化していたことを、読み取ることはきわめてむずかしい。

ところが、等高線はみごとにそれを語る。南側墨線が屈曲したあたりから、東の曲輪内(A)には矩形に等高線がめぐる。つまり、同じ曲輪内でもこの部分は、虎口機能を専有する虎口空間としての性格が強いことが、等高線の入り方から推測されるのである。おそらく虎口内側の広場的空間で、建物をもたない場であったと評価される。

また、屈曲部より西側は、もうひとつの等高線が丸くめぐり、虎口週辺とは異なる空間(B)であったことを示す。茗荷城は大和国の有力国人、古市氏の支城として機能した、在番のための城「番城」と評価されており、空間(B)は専ら小屋掛けや監視の場として機能したと評価される。茗荷城の分析は、測量図の等高線を読むことで、大きく前進したといえる⁽⁹⁾。

ひとつの曲輪が大きくふたつの役割に分かれて機能していたという、見ただけでは把握できない微細な遺構の特質が、等高線によって現われたのである。いわゆる縄張り図より正確な測量図が、総合的な情報量でいかにすぐれているか明白であろう。

それでは縄張り調査は、もはや不要なのであろうか。そうではない。さきに述べたように、城館遺跡の測量調査を全面的に押し進めていくことがむずかしい現在、城館研究者が縄張り図作成を放棄しては、城館遺跡から歴史を究明していく作業は、大きく後退し、頓挫する。縄張り調査には制約があるが、縄張り調査の成果の枠内から最大限、遺跡を読み取る努力をしつづけなければ、全国に1万を超えるであろう、測量も、発掘もされないまま、草木の中に埋もれている城館跡を、活かしていくことはできないのである。城館跡に開発計画が決定し、発掘調査が進展してからでは、もはやふたたび保存していくことはむずかしい。そうした地域の歴史にとって重要な城館跡を、危機に直面する前に認識し適切な保護活動を実現するのに、日常的な縄張り調査は、なにより必要なのである。

そして、こうした作業の積み重ねが、測量調査の成果、さらには発掘調査の成果を一層深く読み取る原動力になるであろう。本来、遺跡を対象とする考古学研究の方法は、ただ発掘調査だけではない。しかし、近年の行政による発掘調査の蔓延は、そうした考古学本来の視野を歪め、発掘調査のみが遺跡調査の方法であるかのような、誤った認識を生み出した。発掘区の中だけで歴史を考える考古学研究者の発掘調査極上主義は、大規模開発にともなう大規模発掘の日常化によって、ますます根強くなる懸念がある。

しかし、われわれはこうした尖狭な発掘主義と断固戦わねばならない。こうした研究者の発掘調査は、調査区を城館全体の中で評価することが少なく、また個々の遺構に執着するあまり、建物は追及しても空地であることに意味がある部分を見逃す調査になりがちである。縄張り調査からの視点を、発掘に活かしていくことが必要である。そして、なにより遺跡の消滅と引きかえの発掘調査が、全国の城館跡にいきわたるのを、そのまま待つわけにはいかない。

では、遺跡に対する最終的な調査手段である発掘調査に対して、縄張り調査のような手段をどのように位置づけ、推進していったらよいのだろうか。縄張り調査で得られる縄張り図は、前述したようにケバ式の表現は微細な遺構を的確に示すことにすぐれているが、土塁の高さ、堀の深さ、曲輪の面積といった数量把握では、等高線による測量図におよばない。可能ならば、城館遺跡の研究は若荷城にみたような良質の測量図をもとに、さらに発掘成果を加えて行われるべきであることはいうまでもない。

しかし、それはむずかしい。だから、縄張り調査による踏査図面の作成は、当面採り得る最善の手段として、本格的調査に向けた仮説的手段として、推進されるべきであろう⁽¹⁰⁾。縄張り調査と測量・発掘調査は決して相反し、敵対するものではなく、お互いに補完しあう、段階の違う調査なのである。縄張り調査で提示された仮説は、発掘調査などで検証していくことになる。そして縄張り調査は、地表面から普遍的に観察・把握可能な、堀・土塁・石垣・虎口などの防御遺構の組み合わせが示す、防御性を主眼に調査されるべきである。

これは、城館のもつ多くの機能の総合的な解明を、他の研究方法と協業してめざすとき、縄張り研究が分担するのに、最もふさわしい部分であろう。だから縄張り図は、城館遺跡を史料化するために作成される、防御遺構の表現に主眼をおいた遺構平面図、と定義される。ただし、こうした研究は、城館の軍事面のみの評価に低迷する危険性がある。しかし縄張り研究は最近、調査の成果を、縄張り編年などによって、史料化することを実現しつつある。低迷を恐れることはないであろう。

3. 縄張り調査の方法と図化表現

(1) 現地調査の準備

縄張り図の作成は、遺構の把握力が一定の水準に達している多人数で、行うことが望ましい。共同作業によって見落としや評価の誤りを未然に防げるからである。現地での作図では、城館周辺の地形図を1:1000に調整したものをベースにして、作業を進める。これ以上だと図が大きすぎて、山中の作業が困難な上、地図をたたみながら図をつくることになるから、個々の遺構のつながりが描きにくくなる。またこれ以下だと図が小さすぎて、虎口の構造など細かな遺

構の表現ができなくなる。

基本にする地形図は、市町村役場で購入できる1:2500都市計画図が最もよいが、それが得られなければ、国土地理院発行の1:25000地形図を拡大したもので、頼りになる。役場で発行している1:10000地形図などは等高線が簡略すぎてほとんどの場合、使えない。この地形図の上に、ケミカルマットやマイラーベースを乗せ、バインダーノートのような台に固定して、遺構を記入していく。トレーシングペーパーのような紙類は雨に弱く、枝などに引っかかって破損しやすいから、使用をさけたほうがよい。こうして準備を整えたら、具体的な作業にとりかかるのである。⁽¹¹⁾

まず、城館遺構の分布範囲を確認することからはじめる。戦国大名の本拠など、あまりにも城域が広い場合は、作図と城域確認を並行して行うこともある。そうでなければ直面する遺構を城館全体の中で認識しながら図化ができるので、最初に城域をつかんでおくのがよい。城館は最高所を中心に形成されるとは限らず、少し下った尾根筋や谷部分に本体が築かれることもあるので注意する。また、尾根筋を遮断する堀切や、曲輪下の斜面など一定の空間に堀を密集して築き、集団行動を阻止する畝状空堀群などは、城館中心部から離れて存在することがあるから、有無を確かめるために、念入りに踏査しなければならない。こうして図化すべき範囲をつかんだら、いよいよ描きはじめる。

(2) 作図と測距

作図するとき、その城館を描いた先人の縄張り図があれば、必ず参照する。眼前の遺構と、すでにある縄張り図を見比べることで、表現が適切か否か判定でき、より正しい評価の図をつくることができる。ただし、先人の縄張り図自体をベースにしてしまうと、その研究者の評価に引きずられてしまい、よい図はできない。批判的精神はいつでも必要である。まんざんと遺構を見るのではなく、虎口・土塁・堀・石垣・土橋の組み合わせといったポイントは重点的に観察する。城館の年代や改修の有無を知るためにも、こうした部分は重要である。

虎口では、曲輪のどこにそれがつくられているか、何か所あるか、両側が土塁で押さえられているか、まっすぐ入れるか、くい違いや桁形になっているか、櫓などその他のものとセットになってはいないか、道はどこにつながっているか、などに気をつける。土塁では、土塁のある位置、長さや高さ、まっすぐかクランクしているか、特に広がって櫓台になるところがないか、などに気をつける。

堀では、堀の両側がどこまで伸びているか（先端が豎堀になってはいないか）、まっすぐかクランクしているか、堀に土橋が架かっているか、堀底に仕切りの土塁があるか、曲輪のまわりをとりまく横堀があるか、畝状空堀群があるか、などに気をつける。石垣では、どの位置にあるか、長さや高さ、どんな積み方か、隅の算木積みはきまっているか、などに気をつける。

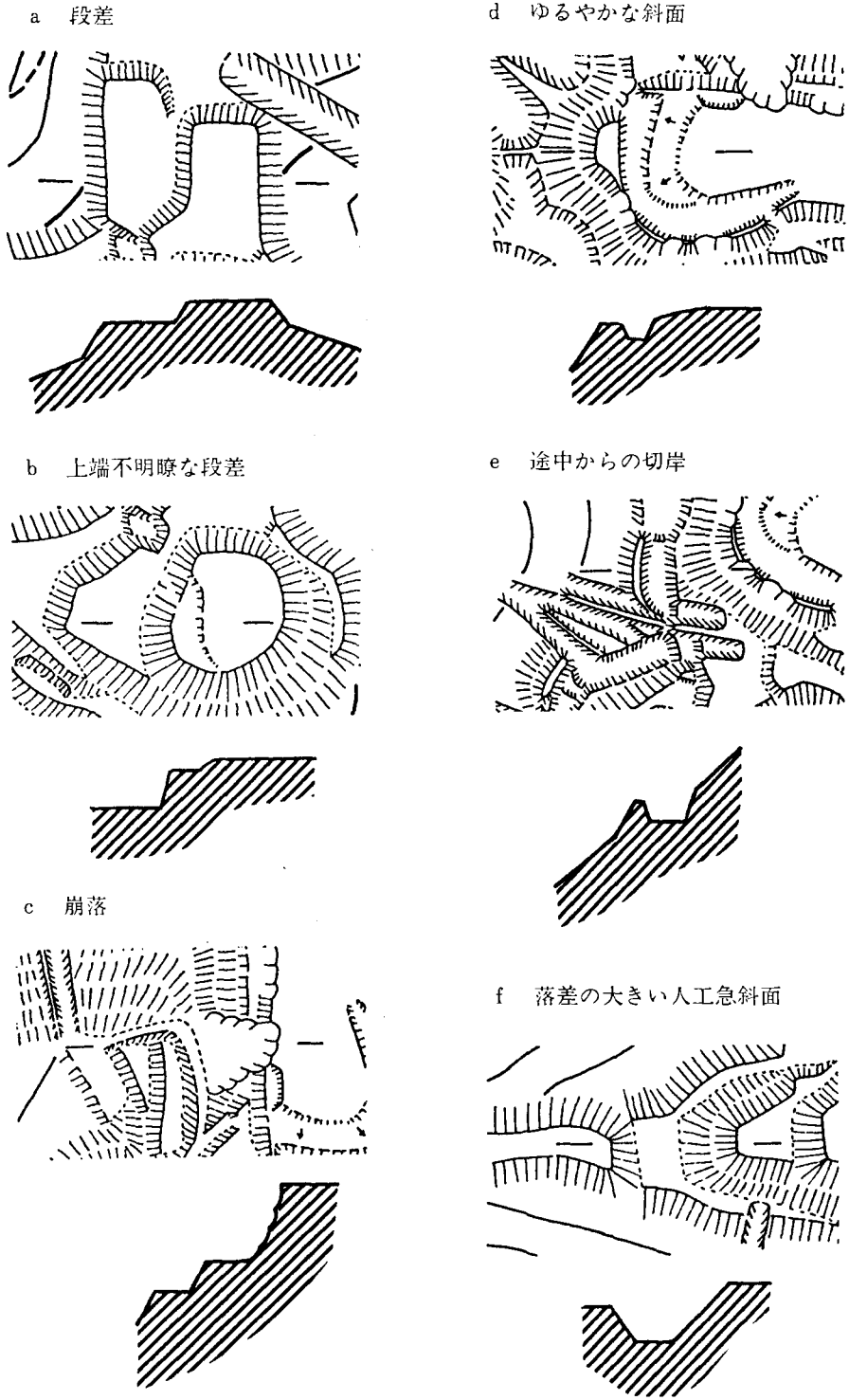


図4 遺構表記の基本

Fig. 4

また曲輪と曲輪のつながり方や遺物の散布の状況にも留意する。

ケバ式で遺構を表記する場合は、図を城館の低いところから描いていくと、ケバの長さが調節できず、実際とズレが生じることが多い。だから、作図は必ず城域の最高所から行う。ケバはもちろん上端から下端にむかって跳ねるように描く。ケバはどこでも同じように描くのではなく、緩斜面では間隔を広く、急斜面では密集させる。堅堀などで遺構がある方向に傾いているときは、ケバの跳ねる向きを傾いている方へ寝かせて記す。具体的な作図手法は、図示したとおりである(図4)。

図化しながらこまめに方位を確認し、距離を測ることも大切である。方位は方位磁石で調節すればよい。距離を測るには、簡易距離計を用いる方法と、歩測による方法がある。歩測では、歩幅が必ず75センチになるよう訓練する。そして、2歩あるいたら、1歩と数えて、知りたい長さを進む。目的の地点に達したら、距離を求める簡単な計算を行う。計算とは、

$$\text{数えた歩数} + (\text{数えた歩数} \div 2) = \text{歩いた距離}$$

である。たとえば、20歩あるいたときは、数えた歩数は10歩となり、

$$10 + (10 \div 2) = 15$$

であるから、歩いた距離は15メートルだと分かる。きわめて単純な計算だから、つぎつぎに作業を進めることができる。ただし、城館調査では草木があるから、直進することは困難なことが多い。長めの数値を出さないように注意する。

こうして現地で作成した原図を、持ち帰って浄書する。浄書には製図ペンを使用することは、いうまでもない。また現地で先行する縄張り図を引用したり、ベースにしたなど、教えられた比重が高いときは、必ず〇〇部分は何某氏原図による、あるいは何某氏原図を参照して〇〇作図と注記する。図4のように部分を描いた図面を仕上げると図5のようになる。浄書には個性が現われる。たとえば、茨城県の城山城(図6)は藤井尚夫氏の作図だが、図に立体感を出すために陰影をつける工夫⁽¹³⁾をしている。

確かに作者の意図は十分成功している。しかし、こうした方法がよいかどうか、意見の分かれるところである。いずれにせよ縄張り図は芸術作品ではないのだから、あまり華美になるのは好ましくないだろう。また山体全体をケバで描くのも、かえって地形の凹凸が形骸化するおそれがないだろうか。なにより、どこまでが人工的につくられた急斜面で、どこから自然の斜面になるのか判断できないのは、図の価値を下げることになると思われる。いずれにせよ、現在のところ縄張り図は必ずこう描かなければならないという、ベストの表記が決定しているわけではない。これからもよりの確な表現方法を模索していかねばならないだろう。しかし、それは勝手な表現をしてよいということではない。縄張り調査も、考古学による基礎的な現地調査方法のひとつである。だから調査・作図の全過程において、考古学の方法に従わなければならない。縄張り調査独特の調査技法や、図化方法は存在しない。この点を城館研究者は肝に銘

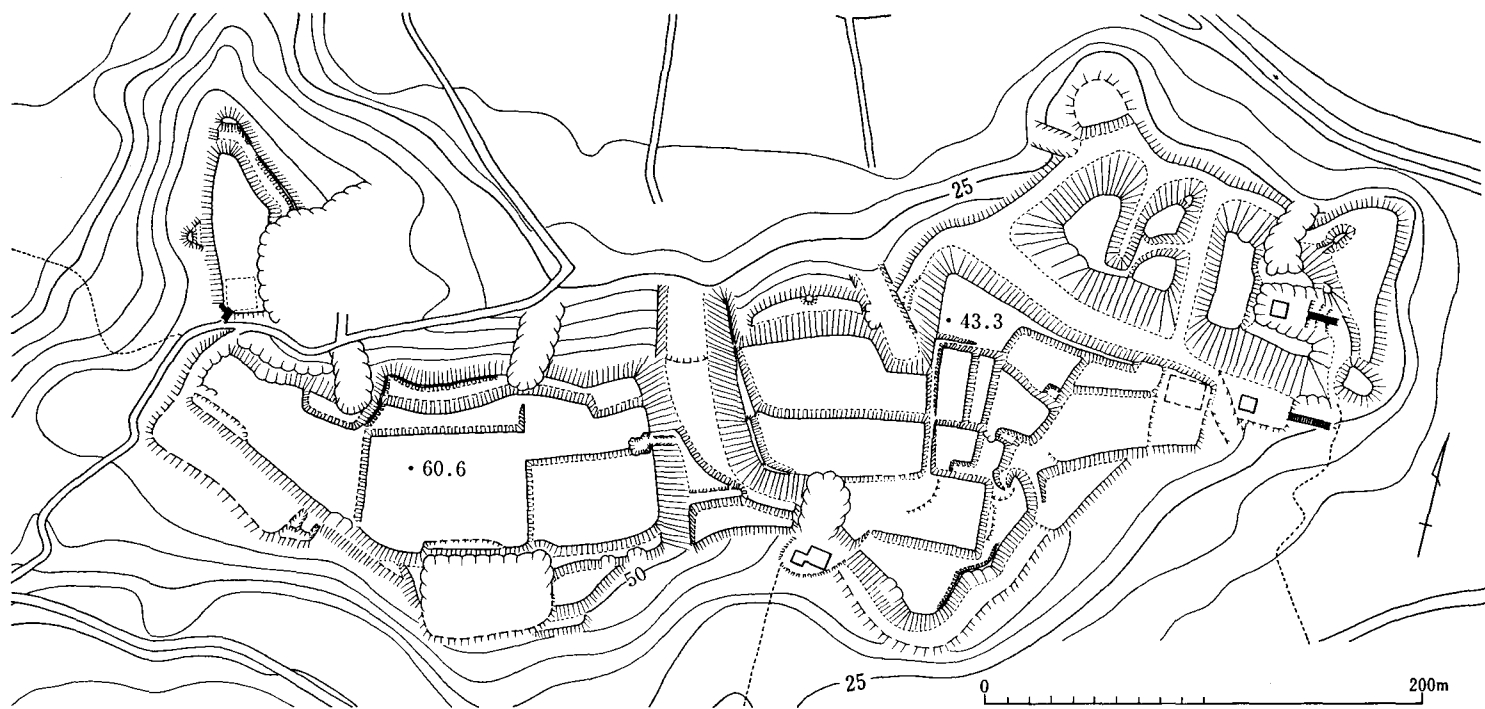


図5 宮崎県穆佐城要図 (千田作図)

Fig 5

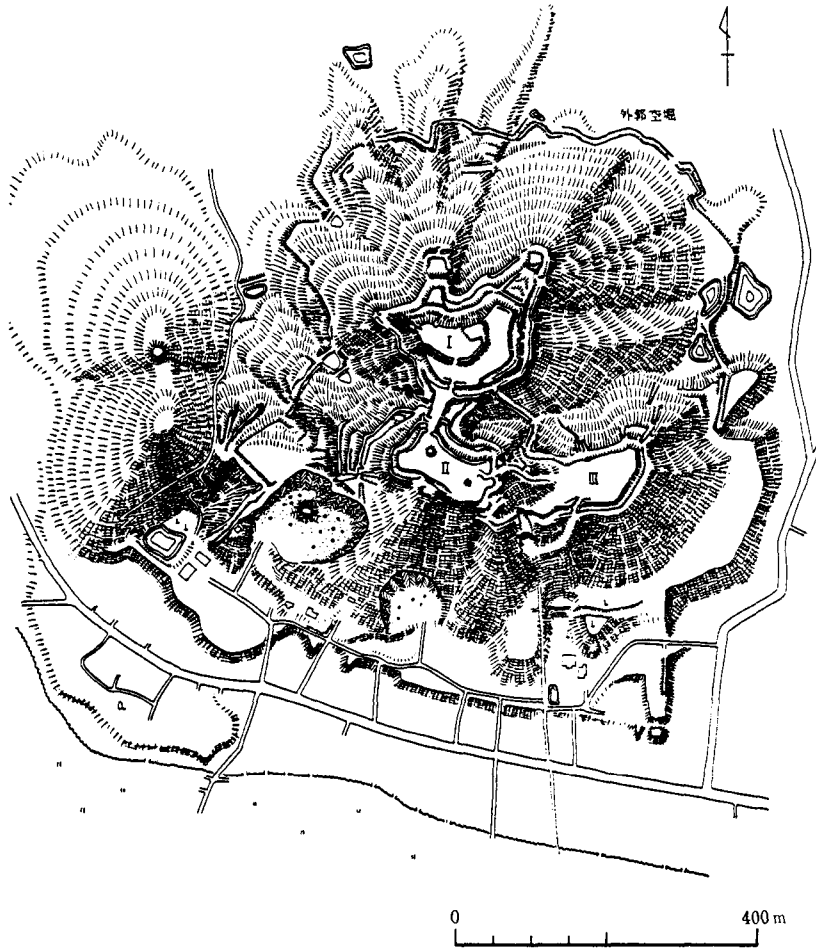


図6 城山城要図（藤井尚夫氏原図）

Fig. 6

(14)
 じなければならない。

4. 調査成果の史料化

こうして作成した縄張り図は、それだけでも城館の構造を明らかにした、重要な史料である。しかし、それをそのまま集成していくだけでは、個別事例の報告と具体例の叙述に終始し、その壁を打ち破ることはできない。これでは村田修三氏が提唱した「中世の城郭遺跡を地域史と在地構造分析の史料として活用する」⁽¹⁵⁾ことは実現できない。そうした隘路を突破する有効な手段のひとつとして登場したのが、城館遺跡の編年研究である。これは城館構造の発展を防御遺構から示し、現在観察できる最終的な城館プランの形成年代を推定する。そして、城館の変化に代表される地域社会変容の画期をみることで、文献史料の制約を超えて、築城主体とそれを

規定した社会を解明しようとするものである。ここでは織豊系城郭の虎口を中心にした研究⁽¹⁶⁾を中心に、組み立て方をたどっていく。

編年研究のプロセスは、第1～第6の段階を必要とする。第1段階は、基礎資料の集成である。関連する織豊系城郭について、できる限り多くの図面を収集する。このとき資料になり得るのは、これまでみてきたような一連の作成の手続きを踏んだ図に限る。また正式な測量調査による図や発掘調査の成果があれば、基準資料として積極的⁽¹⁷⁾に使用する。

第2段階は、縄張り図レベルの検討である。縄張り図は遺構の現状測量図なので、中にはさまざまな情報が含まれている。またそれぞれの城館プランは、地形などの要因に影響された歪みをもつ。このため各遺構プラン間の大まかな傾向は知ることはできても、個々の遺構もっている多くの性質の中から、発達⁽¹⁸⁾の法則性を見抜くことはむずかしい。だから、縄張り図から虎口のような部分を単純に切り取って並べても、多くの成果をあげることはできない⁽¹⁸⁾。

しかし、この段階で城館遺構のどの部分が編年材料に適するか、選択しなければならない。着目するのは最も変化の激しい部分であるが、もとよりその変化の要因が地形によるところが大きい部分などは、使うことはできない。また一貫して変化していく部分でなくてはならないから、ごくわずかな事例にしかないものは、ある段階を証明する有力な指標とはなり得ても、編年全体を支える要素にはならない。

第3段階はモデルの設定である。ここでは編年にもっとも有効な部分に着目しつつ、城館全体の変化を視野に入れた模式化を行う。不要な情報を取りのぞき、必要と認めたものを抽出して型式概念を構成する。このとき重要なのは、その変化がどういう性格の変化であったかを見極めることである。ただ単純から複雑へ、という理解では、変化の背後を貫く理論を見据えることはできない。

織豊系城郭の場合、変化がもっとも激しく、編年に有効と認定されたのは虎口プランであった。そこで虎口機能を、城道の屈曲を生み出す「折れ」と、虎口の防御・出撃の機能を専有して担う場「空間」に分解して、その発展過程として把握した。そして虎口を中心にした城郭全体のモデルを作成した。この作業によって、合理的に各虎口を類型化して認識し、時間的な前後関係を相対的に推定することが可能になる。

第4段階はモデルによる分類の実施である。織豊系城郭では、虎口を中心にした分析で、城郭を5つの基本類型に区分し得た(図7)。

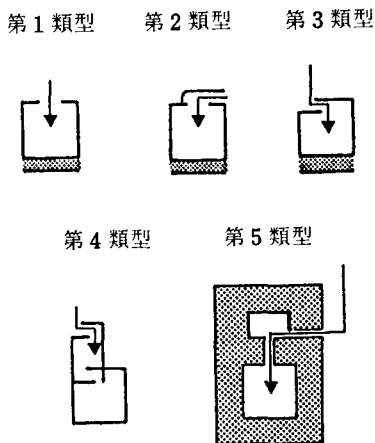


図7 織豊系城郭基本モデル Fig. 7

第1類型の城郭は、0折れ・0空間の虎口を備える。第2類型の城郭は、1折れ・0空間の虎口を備える。第3類型の城郭は、2折れ・0空間の虎口を備える。第4類型の城郭は、2折れ・1空間の虎口を備える。ここではじめて虎口空間が出現する。第5類型の城郭は、多折れ・多空間の虎口を備える。いわゆる近世城郭の成立である。このように虎口の発達は織豊系城郭に一貫して進展する。虎口を基準にしたことは、妥当だったといえよう。

虎口区分	堀切	部分石垣	横堀	総石垣
第1類	■			
第2類	■			
第3類	■	■		
第4類		■	■	■
第5類			■	■

表1 織豊系城郭虎口の属性分析 Tab. 1

第5段階は属性分析による、分類の追検証である。虎口の型式組列の妥当性を検証するため、同一城郭内での他の防御遺構との共存関係を調査する。織豊系城郭では堀の発達と石垣の展開で検証を行った(表1)。0折れ・0空間の虎口を備える城郭は、単純な堀切しかなく、石垣はない。1折れ・0空間の虎口を備える城郭は、堀切しかなく、石垣はない。2折れ・0空間の虎口を備える城郭は、堀切に部分石垣をもつ。2折れ・1空間の虎口を備える城郭は、部分石垣と横堀・総石垣をめぐらせる。多折れ・多空間の虎口を備える城郭は、横堀か総石垣をめぐらし、もっとも発達した姿を示す。

このように、虎口の変化とまったく矛盾なく、堀と石垣はいくつかの形式に共有されながら、ゆるやかに発達していったことがわかる。虎口による分類と編年の設定は、正しいことが検証された。城館の部分の変化に注目する研究は、そのみに目を奪われてはならない。つねに部分と城館全体の関係を確認しながら、進めていくべきなのである。

第6段階は年代決定である。実年代を決定するには、文献によって築城および廃城年代が明確なものを柱とする。そして、発掘成果も活用する⁽¹⁹⁾。戦いに際して臨時に築かれた砦は、築城年代をもっとも明確にしやすい。しかし築造時の緊張度や役割の差によって必ずしも最新の技法が駆使されたとはいえないので、慎重に扱わなくてはならない⁽²⁰⁾。

こうして編年は完成する⁽²¹⁾。同様の手続きによって、少なくとも虎口中心に城郭が発展していった後北条氏や武田氏の城の編年化が可能であろう。また編年の基準を別のものに置き換えることで、より多く地域の城郭の編年化ができると思われる⁽²²⁾。しかし、城館遺跡を史料化する方法は編年研究だけではない。分布や地域差、都市や村落との係わり方を追及することなどによっても、文献だけでは、あるいは発掘調査だけではわからない、中世社会の解明が可能である⁽²³⁾。より充実した史料化の道を探りだす努力が必要だろう。

5. おわりに

いくつかの事例を示しながら、中世城館調査の重要な部分を占める、縄張り調査の位置づけと、具体的な調査方法について検討してきた。最初にも述べたように、中世城館研究は現在、多様な方面から進められており、縄張り調査からの方法は唯一の立場ではない。しかし、その重要性はますます高まっているといつてよい。測量調査・発掘調査にしても、縄張りを読み取る知識がなければ、十分な成果をあげることがむずかしい点もあるだろう。

たとえば城館跡を全面発掘調査しても、曲輪と曲輪のつながかたに注意する、といった縄張り調査ならあたりまえの意識がなければ、個々ばらばらな削平地の調査になってしまう。それぞれの曲輪の有機的な関係と、曲輪内の使われ方の両面をおさえてこそ、掘立柱建物や竪穴建物といった、個別遺構の評価もはじめて成り立つのである。

この点、広大な面積の計画的な発掘調査が進む、北海道の勝山館や青森県の浪岡城は、広大な面積の計画的調査があったからこそ、純粋な発掘調査によって多大な成果があがった事例である。しかし、こうした調査をどこでも行うわけには、いかない。仮に将来、限りなく自由に発掘調査が行えることがありえたとしても、すべての城館跡を発掘すべきではないだろう。

すでに、愛知県の清須城や岩倉城では、城郭・城下全域の地籍図を史料として活用し、発掘調査成果を調査区外の地籍図情報と共に分析し、あるいは事前に検出遺構を予測していく方法が確立している。⁽²⁴⁾ 城館遺跡調査における縄張り調査の新しい意義も、こうした点にあると考えられる。⁽²⁵⁾ 部分の発掘調査の成果を、全体の縄張り調査の成果と合わせることで、より深い成果を得ることができるだろう。全面発掘の場合でも、周辺城館の縄張り調査の成果と合わせることで、さらに性格を鮮明にすることができるに違いない。

もちろん縄張り調査は、これまで示してきたように、それだけでも多くの成果をあげ得る調査方法である。しかし、これだけ城郭遺跡の多彩な調査が行われるようになった現在、より一層他の調査方法との協業を模索していくべきであろう。⁽²⁶⁾ 城館跡の発掘調査においても、考古学者と城館研究者の協業を押し進めていくことが大切である。それには、まず城館研究者が、これまでみてきたような自らの調査方法の意義と方法をよく認識しなければならない。

今や城館研究者が、総合的な城館研究のすべてを担う必要はない。だから城館研究者は、城館の防御性からどこまで中世の社会を読み込めるのか、行き着くところまで先鋭に、深く進むべきである。そうした見方に対して他の視点からの研究は、異なった成果を生み出していくだろう。それを論議することによって、城館のもつ多様な面は、はじめてわれわれの前に姿を現わすのである。諸学問の協業による総合的な城館研究時代の、新しい縄張り研究がはじまりつつある。

註

- (1) 現在に直結する城館の研究は、第2次世界大戦の後、在野の愛好家によってフィールドワークの「縄張り調査」を中心として、学問とは無縁に進められてきた。そこに遅れて近年、「歴史学者」・「考古学者」が参入した状況とあってよい。そこで学者は、城館研究の場にすでにいた、どの学問分野にも属さない、熱烈に城館を愛好し、一般的に城館に関して強固な意思をもつ人々を「城郭研究者」もしくは「城館研究者」と呼び、自らと区別した。そのコトバが発せられるとき学者の心には、いくらかの賤視の意識が含まれていることが多い。城館研究者の長年の地道な努力はなぜ、ありのままに尊重されないのか。学問する人の悲しい現状である。
- (2) 縄張り調査の手法は、唯一地表面観察に留まるべきではなく、測量図の読み込み、発掘成果の分析に不可欠なものとする。しかし本稿ではとりあえず、一般的呼称にしたがって、地表面観察による城館調査を「縄張り調査」、その成果図面を「縄張り図」と呼んで記述を進める。中世城館遺跡調査の歩みと方法論は、千田「中世城館研究の構想」(石井進・萩原三雄編『中世の城と考古学』新人物往来社、1991年)を参照されたい。
- (3) たとえば、「網野一沖縄のグスクだって「城」という表現をしていますけど、これも聖地だし、ある場合には墓でもある。そしてアイヌのチャン、これがまた同じような機能を持っている。そう考えると日本の社会の館もそういう性質を持っていると考えた方がよいのではないですか。(中略)だからこれまでの城に対する捉え方は根底から考え直す必要がある。石井一まさにそうだ!従来の城の捉え方は、簡単にいえば軍事的拠点論一本槍であり、それがただちに階級支配の拠点論にスライドして行くんですよ。(後略)」(網野善彦・石井進・福田豊彦『沈黙の中世』124頁、平凡社、1990年)。
- 本文でも述べたように、私も多様な視点による評価は必要だと思う。しかし、だからといって、地道な遺構把握を確実に行うという基本が、いささかもゆるぐことはないと思う。その城館遺跡を確実に把握せずに展開される、さまざまな評価や解釈は、鮮やかに見えてはかないものになるのではないか。城館の軍事面の性格を究明することは、城館遺跡を確実に把握するとき、不可欠の要素である。それは決して城館の多様な面を明らかにしていくことと、矛盾・対立せず、評価を深めるものである。
- (4) たとえば、坪井清足ほか監修『日本城郭大系』第1～18巻、別巻2巻(新人物往来社、1979～81年)や、村田修三編『図説中世城郭事典』第1～3巻(新人物往来社、1987年)を代表として、あげることができる。また文化庁の補助を受け、各県ごとに行われる、中世城館跡分布調査においても、すぐれた成果を生み出した、多くの調査の担い手が在野の城郭研究者であった。最先端の城館研究にも、在野の研究者の占める割合はきわめて高く、関心も深い。それは、城館研究最大の研究集会である、全国城郭研究者セミナー参加者の7割以上が、在野の研究者であることに、よく示されている。城館研究はこうした幅広い研究者と、一層連携して前進していかなければならないと考える。
- (5) 荒井信貴・奥田敏春・小林吉光『岩津城跡測量調査報告書』岡崎市教育委員会、1989年。岩津城を事例に、縄張り図と測量図を比較して縄張り図の一定の精度を確認することは、すでに千田「中世城郭から近世城郭へ」(『月刊文化財』第305号、1989年)でも紹介している。今回補論して改めて紹介する。
- (6) 比較に使用した測量図のコンターは1メートルである。なお岡崎市教育委員会は中心部分の25センチコンターの図面も作成したとのことだが、全体は紹介されておらず、比較には使用できなかった。
- (7) 茗荷城測量図は、1984年に、村田修三氏、坪之内徹氏を中心に、青木陽子、奥田明代、大河原紀子、河野咲子、黒田洋子、平真由美、日高しのぶ、秋田真吾、神田高士、木南哲哉、多田暢久の各氏と千田が参加して作成された。その概要は、村田修三「茗荷城跡の測量図紹介にあたって」(奈良女子大学史学会編『寧楽史苑』第30号、1985年)に報告されている。
- (8) 多田暢久「城郭分布と在地構造」(村田修三編『中世城郭研究論集』、新人物往来社、1990年)。
- (9) 単郭の小規模城館の多くに、茗荷城と同様の曲輪内の機能分化が、行われていた可能性が高いと思われる。こうした問題については、測量図をより深く史料として活用するために、一層の注意をはらっていききたい。

- (10) 縄張り調査の成果などを「広義の考古学」と位置づけて積極的な使用を提議するのは前川要氏である。前川「近世都市遺跡の展開」(『考古学ジャーナル』第323号, 1990年参照)。
- (11) こうした準備の他にも、現地調査には留意する点が多い。いうまでもないことだが事前の文献収集や、史料所在の確認と閲覧希望の連絡などは、綿密に行う必要がある。また、踏査時の服装にも留意が必要である。さらに当然であるが、良好に踏査できる季節は限られる。夏期の調査は十分な成果を期待できない。
- (12) 代表的な簡易距離計には、レンジング120型携帯距離測定器がある。小型軽量で、2～30メートルまでの計測が可能である。実際の山の中では、立木や草に遮られ30メートル以上を良好に見通すことができないことが多いから、おおむねこれで役に立つ。ピントを合わせることで測距できるから、堀切などの対岸に計測のたびに渡る必要がなく便利である。精度は距離5メートルで99%、20メートルで97.5%、30メートルで97%を保ち、1:1000程度の図面では十分許容範囲である。
- (13) 藤井尚夫「城山城」〔前掲註(4)『図説中世城郭事典』第1巻〕所収。
- (14) 縄張り研究においては、いまだに墨書きやえんぴつトレースをはじめとする、考えられないようなラフな図面が堂々と現れる。その作者が城館研究者を代表する立場であることもしばしばという現状は、城館研究の未熟な状況を、余すことなく露呈している。
- (15) 村田修三「城跡調査と戦国史研究」(『日本史研究』第211号, 1980年)。
- (16) 千田嘉博「織豊系城郭の構造一虎口による縄張り編年の試み一」(『史林』第70巻第2号, 1987年)。
- (17) 近年まで城館研究者が全国的に集まる会も、信頼できる縄張り図を集成した史料集もなかったため、図面の収集は自分で全国を駆けめぐるか、個人的な友人関係を通じて、細々と行うしかなかった。しかし現在は全国城郭研究者セミナーの開催によって全国の主要な研究者が集まり場が整えられ、『図説中世城郭事典』(前掲註(4)文献)の刊行などによって、大幅に状況は改善された。
- (18) 八巻孝夫「馬出を考える一その概念とことばの由来一」(『中世城郭研究』第3号, 中世城郭研究会, 1989年)、「後北条氏領国の馬出」(『中世城郭研究』第4号, 1990年)は、それぞれ武田氏、後北条氏の城郭の馬出しに着目して、その編年化を図ろうとした力作だが、縄張り図レベルの検討に留まるため、必ずしも意図は成功していない。
また池田誠氏は、1989年の全国城郭研究者セミナーのシンポジウム「城郭の構成要素を考える」の千田の発表、「虎口分析の方法」での織豊系城郭の編年の構想と成果に対し、倭城の虎口97例を事例に、同時代でもさまざまな形態の虎口があり、編年は疑問であるとした。これも縄張り図レベルでの検討に留まっていることが、踏み込んだ分析を妨げている例と思われる。文禄・慶長の役段階の倭城では、多様な型式の虎口が混在するのは当然であり、そうしたものが淘汰され、城郭全体の虎口型式が整ってくるのは、文禄・慶長の役後の国内築城において主流になると思われる(千田前掲註(16)論文参照)。
- (19) 現状では考古学の遺物の編年より、織豊系城郭の縄張り編年の方がきめ細かく、発掘の年代観を全面的に中心にしていくわけにはいかない。しかし、発掘調査により同時代あるいは江戸期に入ってからなどのさまざまな城館遺構の改変が明らかになることがある(木戸雅寿・坂田孝彦はか『特別史跡安土城跡発掘調査報告1—伝羽柴秀吉邸跡—』滋賀県教育委員会, 1991年)。発掘の成果によって、一層編年の充実が努めたい。また、愛知県の沓掛城跡の主郭の発掘調査では、永禄期以降の遺物は出土せず、城郭の機能もそのとき停止したとするが(豊明市沓掛城址発掘調査編『沓掛城址』豊明市教育委員会, 1986年)、『織田信雄分限帳』の「一、貳千貫分 くつかけ 中根殿」の記載と、馬出しをもつ城郭遺構から、天正13(1585)年頃まで、存続したことが確実である。こうした遺構編年と遺物編年のずれは、天正期に入ってから主郭部分の非居住スペース化といった流れの中から読み込まなければ、評価を誤ることになる。
- (20) 千田嘉博「城郭史の立場から」(『長久手古戦場国指定史跡指定50周年記念シンポジウム・長久手の戦い資料』長久手町・長久手町教育委員会, 1989年)において、小牧・長久手の戦いで、築かれた砦には場所と役割によって明らかに普請度に差があることを示した。

(21) 完成した編年はつぎのようなものである〔千田前掲註(16)論文参照〕。

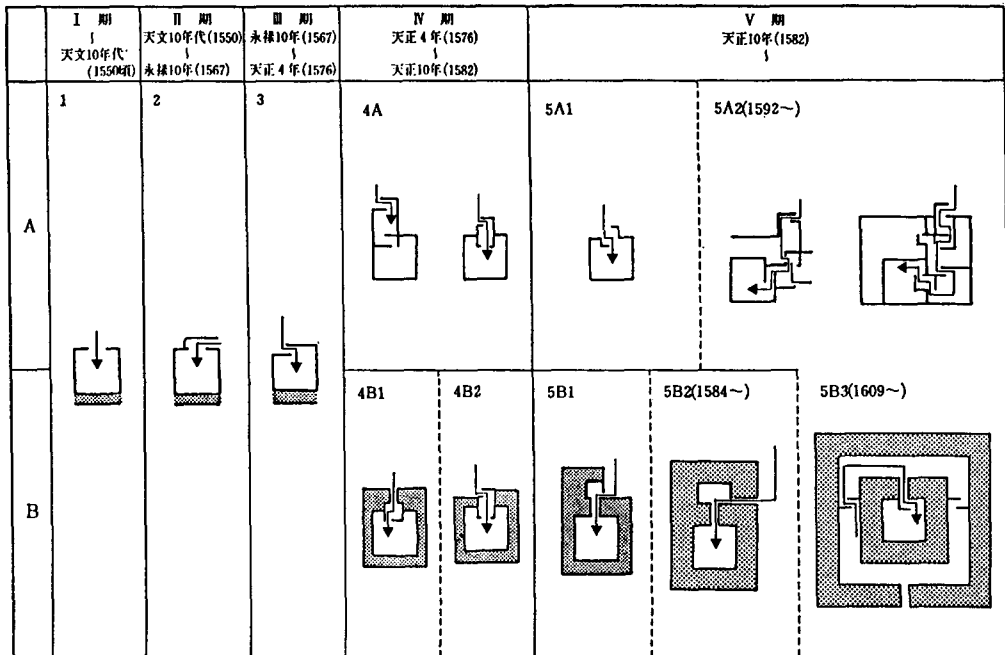


図8 織豊系城郭の編年

Fig. 8

- (22) 織豊系城郭の編年の成果を具体的な地域史研究へ使用したものに、千田嘉博「尾張国における織豊期城下町網の構造—織田信雄期の支城を中心にして—」(村田修三編『中世城郭研究論集』新人物往来社, 1990年)がある。また福島克彦「織豊系城郭の地域的展開」(同文献所収)は、織豊系城郭が丹波地域の土豪・国人領主にどのように受容されたか、編年と変質の両面から追究した力作である。
- (23) 最近の城館研究の成果に、柴田龍司「中世城郭の外郭部について」・斎藤慎一「上野国中山城の考察—中世城郭研究への提言—」(『中世城郭論集』創刊号, 1987年), 松岡進「戦国期城館遺構の史料利用をめぐる」(『中世城郭研究』第2号, 1988年), 村田修三「城郭概念再構築の試み—チャングスクを素材にして—」・中井均「織豊系城郭の画期—礎石建物・瓦・石垣の出現—」・小島道裕「平地城館趾と寺院・村落—近江の事例から—」(村田修三編『中世城郭研究論集』新人物往来社, 1990年), 千田嘉博「村の城館をめぐる五つのモデル」(『年報中世史研究』第16号, 1991年)がある。
- (24) こうした先進的な調査の進展は、88年清須シンポをまとめた『清須—織豊期の城と都市—』資料編・研究報告編(東海埋蔵文化財研究会, 1989・90年)や、鈴木正貴ほか『清須城下町遺跡』(愛知県埋蔵文化財センター, 1990年), 金子健一「戦国城下町岩倉の復元的考察—調査の成果と地籍図の検討から—」(『年報平成元年度』愛知県埋蔵文化財センター, 1990年)に明らかである。
- (25) 前川要『岩崎城跡』(愛知県日進町教育委員会, 1987年)は、縄張り調査の成果と発掘調査の成果を統合して、新たな調査方法と成果を示した、先駆的な研究である。これからの城館調査方法の手本となるものであろう。
- (26) 考古学・文献史学・歴史地理学・城館研究の協業による城館・城下研究の試みとして、前川要・千田嘉博・小島道裕「戦国期城下町調査ノート」(『国立歴史民俗博物館研究報告』第32集, 1991年)がある。

(国立歴史民俗博物館 考古研究部)

Significance and Methodology of Ground Plan Investigation
of Medieval Castles

SENDA Yoshihiro

In recent years, investigations of medieval castles have come to be conducted, at long last, in various methods from the viewpoints of philology, historical geography, archaeology, and so on. Among them, ground plan investigation for quick and easy grasp of the outline of castle remains, is wide-spread. It is an investigation which aims mainly at grasping the ancient defensive structures of a castle, including the moat, earthenworks, and Koguchi (gateway), by observation of the ground surface. Then the results are compiled in a drawing".

Since these investigations have been long supported by local amateurs, standards for investigation are not uniform. In this paper, therefore, significance and methodology of ground plan investigation are discussed in detail. Consequently, it is shown that ground plan investigation should be performed as a preliminary work before surveying or excavation. Ground plan investigation and surveying or excavation are defined as compensatory on different levels.

A ground plan investigation method, which can be treated as a standard, is presented as follows: Drawing should be based on an exact topographical chart; Distance surveying is indispensable, using a simplified surveying apparatus or by pacing; Detailed observation of the gateway and other parts, which are important points in understanding the original structure, is necessary; Preparation of a clean result drawing should be based on archeological techniques. Finally, to show methods for the utilization of ground plan drawings as materials for the clarification of area history, the concept of ground plan drawing and their preparation processes are described, together with chronological examples chiefly involving gateways of Shokuho-(Oda and Toyotomi) type castles.

Ground plan studies from now on should be carried further forward through cooperative work with others by various different researching methods to promote the study of castles. In this context, the study of ground plan investigations must be further deepened from the point of view that these investigations will clarify medieval

society through the defensibility of castles. This is a role to be played by ground plan research in comprehensive castle study which has just started. By presenting and discussing different castle images from various fields of study, medieval castles with diversified aspects will show themselves for the first time.

Figure 1 : Model plan of mountain castle in the latter 16th century based on the Japanese terrain

Figure 2 : Ground plan drawing and survey drawing of Iwatsu Castle (Aichi prefecture, latter 16th Century)

Figure 3 : Survey drawing of Myoga Castle (Nara Prefecture, latter 16th Century)

Figure 4 : Basic method of expression for ground plan drawing

Figure 5 : Ground plan drawing of Mukasa Castle (Miyazaki Prefecture, latter 16th Century)

Figure 6 : Ground plan drawing of Shiroyama Castle (Ibaragi Prefecture, latter 16th Century)

Figure 7 : Basic model showing establishment process for modern Japanese castles

Figure 8 : Chronicles of establishment process of modern Japanese castles (from middle of the 16th Century to the early 17th Century)

Table 1 : Analysis of correlations between development of Koguchi (getaway) and of moat and stone wall